

文化高知 14

情報洪水に流されたくない

高塚 準一郎

目には見えない「電波」という怪物が、もしも見えていたら……なんて想像すると空恐ろしい。おそらく我が日本列島の上空は、電波の糸が無数にからみ合い、おおいかぶさり、息づまる思いの日々を送っていることだろう。

見えない「電波」を利用しての情報伝達は、年を追って進歩発達し、その機能・用途には理解を超えるものがある。

その昔、早馬・早飛脚で時の流れ、社会の動きを知った時代から、たかだか二百年ほどしかたっていないのに。しかも、この三十年余りの間に、我々の生活はいつのまにか「電波」にジャックされていた。世界の各地からその日の出来事が日本全国に流され、茶の間に伝えられ、いまや、全世界に秘境の地は存在しえないといわれる程、その情報ルートは完璧にはりめぐらされている。

その最大の要因は宇宙開発、つまり衛星の出現である。

CSⅡコミュニケーション・サテライト/通信衛星と呼ばれるこの情報伝達システムは、さきの韓国でのアジア

大会でも見られるように、全世界に同時に、すべての情報を伝えることができる。今、放送界で主流を占めつつある国際ニュースはすべてCS経由である。



足摺岬・横田照生

BSⅡブロードキャストイング・サテライト/放送衛星は現在、赤道上空三万六千キロの宇宙に静止し、新たな放送を展開すべく、テストがくり返されている。

こうして日本の電波事情は、加速度

的に衛星時代に突入している。昭和六十三年には、通信衛星機構によって更に大型の通信衛星が打ち上げられ、日本の四百万世帯を対象にCATV多チャンネルサービスが検討され、やがてアメリカ並みのCATV(有線テレビ)へと変わってゆくことだろう。衛星放送にしても従来のテレビ五百二十五本方式から、千二百二十五本方式へと転換し、ハイビジョン放送に姿を一新することになる。未来の話ではない。ここ四、五年先のことである。

まさに情報洪水の時代が迫ってきている。もしも無選択に受け入れていたのでは、洪水に押し流されていくだろう。洪水の時代は、云いかえれば選択の時代でもある。画一的情報のみに頼らず、地方独自の情報文化を創造し、継承してゆく、そんな努力をお互い考えてみようではないか。そのためには文化を育てるための投資も必要である。投資もせず、中央にのみあこがれる文化不毛の都市にはなりたくないし、情報洪水に押し流されるような生活はゴメンである。

(NHK高知放送局長)

土佐つれづれ

大塚 和

ジェット機が高知空港の上空に来たとき、ここが自分の生れ育ったところかと、眼下を見おろし、深い感慨をおぼえた。

昭和四十三年の夏、高知を舞台にした映画『孤島の太陽』を宿毛の南、初島に一ヶ月半のロケーションをしたのが、三十五年ぶりの高知訪問であった。この間、二、三回は高知なつかしさの余り、ふらりと帰ってきたことはあったが、その時は汽車で四国山脈をこえての長い旅であったから、二時間で生れ故郷の土をふむなぞ想像もつかなかった。

城北中学校の四年の時、同盟休校の結果、高知を追われるように逃げ出した想い出が、突然よみがえってきた。あの時は浦戸湾から船にのり、翌日大阪について汽車にのりついでいま、その三十五年前の感傷にひたりながらおり立った空港は、小さくみすばらしい風景であった。

空港のある日章村が私の生れ育ったところである。しかし、周辺は余りにも変っていた。立田村は思い出をたどってみても何もよみがえっては来ない。生れ育った田村は、立田村から小学校を右に見て、前浜へ通

じる道筋にあった。その道から五十メートルぐらいい左にわが家はあったが、もう跡かたもなかった。

家の中を流れていた小川は今もそのままであったが、あまり小さいので驚いた。この川で魚をおいかけ、水泳をしたのか、三十五年の歳月は何もかも彼方へおしやっていた。隣村まで「絵馬」を描いてもらいに行き、にぎやかにお祭りに興じた近くの神社も、ヒワをとりに出かけた田圃も遠くへ行ってしまうていた。

父は田村で医者を開業していた。根っからの遊び人で器用な人であった。川辺にぶどうを、庭にみかんと柿をうえ、草花も手広くやっていた。鶏を何百羽かかき、卵をうまくなると、父は手術用のメスで首をちよん切った。首のない鶏がツツツと走るのをこわごわ見ていたものだ。父は芸者遊びが好きであった。後免であそび、芸者を二、三人、人力車でおともにつれて帰ってくるのがよくあった。母がぶつぶつ言いながら、芸者に金を支払っている風景など思い出した。

その父が七才のとき死んで、高知の病院に勤めていた兄があとをつい

だ。兄（故大塚敬節）は学生時代から医者はず、文学志望だったようだ。そんな兄が片田舎で医業をつづけることに嫌気がさして、漢方医になるべく、昭和五年、故郷をすてて上京した。その二年後、私が中学四年のとき、上京したのも兄が東京にいたためである。

田村から後免まで自転車で三十分、後免から高知市の榊形まで電車で四十分、榊形を下りて刑務所を右に見ながら城北中学まで通っていたが、兄一家が上京したあと、母と二人で田舎の家をたたみ、高知市の旭町に引越した。家は鏡川のそばにあった。そのような思い出が、走馬燈のようにかげめぐった。

故郷高知を舞台にした映画を作りたいとはかねがね考えていた。そんなとき、初島の保健婦の労苦の話を知り、これこそ自分の狙っていたものだと、映画化にとりかかった。

旭町から西には一度も出かけたことのない私には、宿毛周辺は異郷の地であった。宿毛から連絡船で三十分、初島につき、島を一巡したとき、先づ宿泊や食事のことが悩みの種となった。保健婦をやる榎山文枝や俳優たちをとめる家を先づ探し、一行五十人余りが民家に分散することになった。食事は朝昼晩とにわか作りのプレハブでスタッフ全員がこれにあたった。

それから七年がたった。再び高知を舞台に映画を作ることになった。

高知出身の中島丈博のシナリオ『祭りの準備』である。こんども西の果て、中村市が舞台である。『孤島の太陽』よりは地の利を得て、中村という町の中の仕事である。町はずれに新しいペンションを見つけ、みんなそろって宿泊出来たことがなによりも助かった。それに食事も出来、風呂もある。このことが、地方ロケでは一番大事なこと、皆な家族のような二ヶ月の生活がはじまった。

仕事は順調にすすみ、大過なく終りそうであった。ところが、大台風の襲来にあい、スケジュールは大いに狂ってしまった。台風は物凄く、ペンションは水びたしになった。それに不便なところである。予定の俳優が到着しない。今、松山にいるがどうすればいいか、いま宇和島まで来た、いま徳島県の池田町にいる、という俳優の連絡に手のうちようがない。さんざん苦労して俳優がそろうまでに四、五日はかかった。ロケーションというものは必ず何かおこるものだ、と思わず長嘆息したものであった。

想い出はなつかしい。もう一度高知を舞台に映画を作りたい思いでいっぱいである。

（映画プロデューサー）

地震と酒

松岡 司



高知市の姉妹縁組都市北見市には地震が発生しないらしい。あちらの人に聞いた話で、なる程あの付近は火山帯が走っていないようだ。

僕の生れ故郷は佐川町。地酒「司牡丹」のあるところで、当時父は佐川高等女学校の教師であった。その頃の父はよく知らないが、晩年は程よく酒を好み、まずこぼれた酒に舐めつかんばかりに好きだったことか知らずれば、およそは想像できる。なかなか味な任地を選んでくれたものだが、果して思うとおりの酒が飲めたかどうか。

一家が南海大地震に見舞われたのはこの赴任中の昭和二十一年十二月のこと。震源地は土佐沖と報告され、日本の西半分は大被害をもたらしたが、とりわけ高知県の損害は大きかったらしい。敗戦にうちひしがれた身体に鞭うって復興に努めていた県民にとっては、更なる苦難のおいうちであったわけだ。一家の無事を確認した父は、田舎の祖父に打電し

た。中にこうあったという。

『ツカサラダイテトビダシタ』

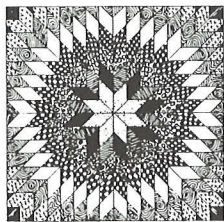
父を知る祖父もこれには驚いた。いかな左党でもグラグラするなかで酒をかかえて逃げるとは。はて正常か異常か。冷静か動揺か。嘉永末の大地震で佐川の士浜田虎吉（のちの那須信吾）は、背中に味噌桶をかついで山にかけ上った。大潮の流言にまどわされたためだが、味噌は当時の人にとって生活の必需品だった。これは一見珍聞のようで正常・冷静だったのだ。

ひそかに畏敬した我が父もさすが、さすが。動揺したのは父ではなく祖父だった。もうおわかりのように、その時祖父は僕の存在を忘れていた。はなはだシャクだが、ひねくれても古い話である。

天災は忘れた頃にやってくるという。東海地方だけに気をとられず、酒のフラフラ以上に用心しないと、そらッ、本当にグラグラとくるかも。（県立郷土文化会館主監）

私の定期便

秦泉寺 由子



（カットは PENGUIN HAND-BOOKS 『THE PERFECT PATCH-WORK PRIMER』より）

パッチワーク・キルトの技術指導のため土佐と京都を三日おきに行き来するようになって、丸二年が過ぎてしまった。いまでは朝起きて顔を洗うのと同じように、生活のひとつのリズムとなっている。

今日は高知、明日は京都という短期間の移動は、日本の風土の中ですばらしいコントラストと、新鮮な驚きを私に与えてくれる。

夏の夕ぐれ——京都鴨川の川面に揺れ動く提灯の明かり、やわらかな祇園囃子の鉦のひびき。一方、肌を焼かんばかりの炎天下で乱舞するよさこい祭り。強烈なサンバのリズムが追手筋にある私のギャラリイの中心まで聞こえてくる。

冬——白く薄化粧した京の街を背景に、鴨川の清流に吹い込まれるように降るみぞれの幻想的な日本画の世界。それに対し、少し汗ばむ感じがする土佐。私のギャラリイからは日曜市が見える。青々とした植木やみずみずしい新鮮な野菜をあふれん

ばかりに並べた露店が続く。

きめ細かな味の京料理と豪快な味の土佐の料理。やわらかな稜線の京の山々と土佐の雄大な太平洋の波。陽と陰、明と暗。土佐と京都をくらべると、同じ日本の中で風土や文化が両極端と思えるほど違っている。それは私の専門分野であるキルトの表現する世界にも通じる。キルトのつくり出す張りのある山の部分や縫目のほしる谷の部分は、光と影のようにはっきりとしたコントラストを形づくる。

土佐と京都、飛行機に乗ればわずか一時間あまりの距離ではあるが、まったく違った空気を体験できることは、私にとってすばらしく魅力的なことである。私が物をつくるうえで、何らかの発想をそこから得ていることも確かなようだ。飛行機ぎらいの私が、この生活のリズムを変えられない理由もその辺りにあるのだと思う。いましばらく、この「定期便」はやめられそうにもない。

（キルトグループ主宰）

ニュー・エリア 熱き芸術家たち

——五県交流展のこと——



坂田 和
(文・カット)

今年の夏、八月五日より十日まで、高知新聞で「ニューエリア・南国展」という展覧会が開かれたが、御覧いただいた方もあるかと思われる。実質は、香川と高知二県の交流展で、高知新聞ほかの紙上でも紹介されてかなりの反響を呼んだ。

この展覧会は、実は来年一月に県立郷土文化会館で開催予定の「ニューエリア 熱き芸術家たち 岡山と四国四県の五県美術展」への第一段階、つまりは足固め、布石の目的で開いたものである。香川十六名、高知二十名の作家の協力を得て、一応の目的は達成された。

昨年、坂出の画廊「タブロー」で、四国四県と岡山の主として教員の作品を集めて「瀬戸大橋文化圏五県美術家展」が開かれた。地元グループである「現代美術 蓼」の企画で、五県十六名の作家が出品し、高知からは私と平田慎一、北泰子が参加した。

その交流会の席で各県の美術界の

を夢が行っている事実を見て、優柔不断の私が「やろう」と決めたのは、自己を抜け、新鮮な場で仕事をしたかったという願いもあった。二、三の親しい人に相談もした。大半は慎重にと友情ある言葉をいただいた。

昨年二月ごろだったか、高松で浜野さんらとうどん店で食事しながら開催の意を伝えた。駅まで送っていただき、どしゃ降りの夜の夜空を私は眺めていた。浜野さんが、ポツリとつぶやくように「やれますかな」と言われた。やや間を置いて「ダメでもともと、困る事があつたら連絡して下さい。永くは続かんだろうな……」。私自身の不安な心を全く見透かされたようにも思え、土佐人気質をよく知って私の内心に火をつけられたかも知れない。やれるかどうか不安が残っていたので、大変な事を引き受けたなどの思いがあつたが、ホームで握手しながら、「御吉報、待っています」との言葉に胸にジンと来るものがあった。「ダメでもともと」と、この一言で私の不安は消しとんだ。言葉の扱いの旨い方だなど思いながら帰りの車中、心は五県美術展へのあれこれの事で一杯であつた。

五県美術展の前段階としての二県交流展は一応の成果で終った。考え

実情が話題となった。私は少々ウイスキーが回っていてつい口が軽くなり、高知は県展が主流であること、中央につながるグループがあつて、リーダーを抱える大小ピラミッド型の構造であること、高崎元尚さんの現代美術の継続した活動、郷土文化会館の積極的な企画、そして県民性などに触れた。香川の浜野年宏さんを前にして「蓼」の国際的な、しかも、地道で永年に渉る活動に素直に感動した旨を述べた。「浜野先生は坂本龍馬のような所がありますね」と言ったら、苦笑されておられた事がつい昨日のこのように想われる。ともあれそれから何度か、香川との往来があり、会員八十名を擁する「蓼」展のひらかれた最終日、浜野さんや他県の方もまじえての席上、五県美術展を高知でという話が出された。高知が受け皿になりそうな気配は感じていたが、五県展を高知でという話が出たらどうお断りしようか、あれこれ考えもしていた。組織

てみればあれこれ目まぐるしい程の繁雑な日々であつた、友人を始め、報道、職場で同室の平田、北、OBの方にも御尽力いただいた。蓼側と連絡をとりながら、人選を決めたら、殆んど教職関係になつていた。このあたりは来年一月の「ニューエリア展」の反省材料でもある。

八月、「ニューエリア南国展」にペン画を出して下さった仲隆三さんが、高知新聞(七月十日付)に一文を書いて下さった。交流会では高崎元尚さんが立体作品と平面作品が同一会場で展示された意義を述べ、浜野さんは十年続けたと言われた。平面は両県の相違が明確に出た。五県は更に多様化して、それぞれにお国柄が見られ、作家の方々も、何かをつかんでゆかれるだろう。狭い風土でせめぎ合うだけでなく、ニューエリアの名の通り、地域の枠は取っ払い、技法も表現様式もどんなものが出てくるかわからない。「いごっそもとに開かれたいごっそうが、他県と交流してより豊かに高揚され結実する、そういう事を願って、今後もし世話人としてやってみようと思つている。

高知学芸高校教諭 ニュー・エリア 熱き芸術家たち世話人

場合とこの辺が少し違うようだ。

浜野さんというリーダーがいて若手が多く、今まで見た限りでは横のつながりで自由に、地道に活動しているようだ。タブロー(蓼団体の画廊)の名の通り、十数年前、師弟五名で発表したものが今日の国際的な仕事をするまでに至ったのは立派な事であろう。このあたり県民性や風土性の相違だろうが、五県交流の場を持てば相互に理解し合えるし、各県作家の刺激の場としても良いのではないかと思つた。

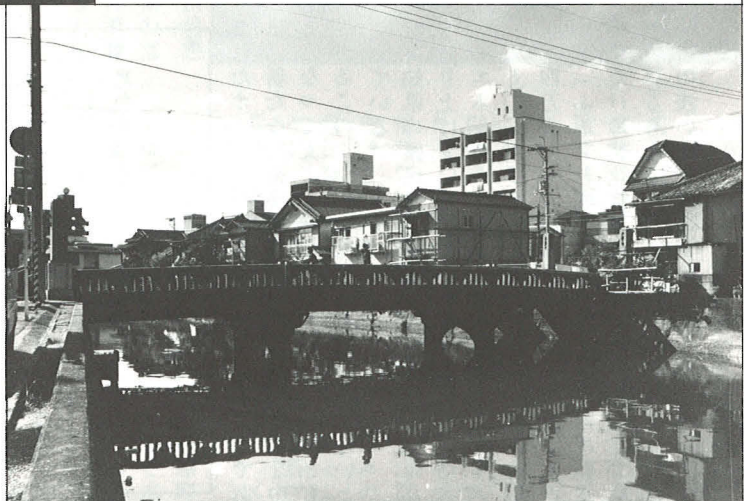
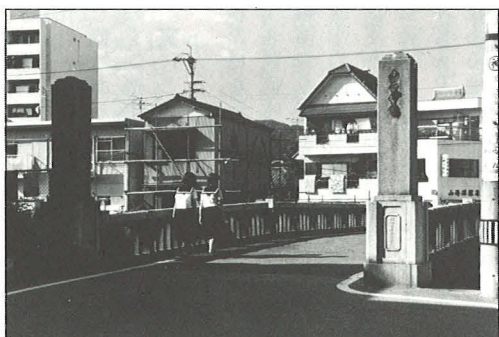
旧友で詩人の西一知さんに交流展の事を話すと、「そりゃあえい、おまんやらにゃあいかんぜ、権威じゃあ、賞がなんぜよ、閉鎖的なのはいかん」と言葉が返ってきた。

地方作家という言葉には妙に抵抗、ある種の心理的な負い目を感じる事もある。中央に何かしらひけ目を感じている時もあったが、人口六万程の坂出という地方でも国際的に注目され、中央の作家が注目する程の事

私の風景

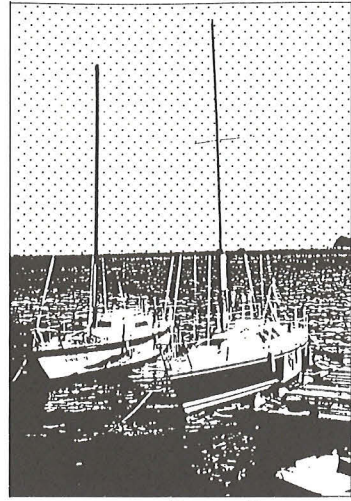
豊栄橋

西岡 富久美



現在の豊栄橋は昭和三年三月に架設されたものです。夕暮れがせまる古い橋の上を、さまざまな人たちが行き交い、それを眺めるのも楽しいものです。

文化行政雑感



USA・祖父江建樹

高知県教育委員会の文化振興課長に着任して、はや三カ月。今年七月まで文化庁に在任した私にとって、東京より妻と子供三人を伴っての真夏の「大移動」であった。

着任機の窓から垣間見た文字通りの海の青さや山の緑、そして痛さすら感じさせる強い陽光から成る一大風景図は、そこに住まいする人々の情感を連想させ、幼くして口ずさんだあのペギー葉山のヒット曲をふと思い出させるものであった。

土佐の人情は、酒をくみ交わす風情のうちにも最も豊潤な形をとって現れ、えも言われぬ土佐の訛と相まってこの上ない機微を奏でるように感じられる。県民文化の振興について云々するにも、こうした風土や人情の醸し出す県民の心根へ深く思いを致すことが必要と考えている。

私に与えられた高知県の文化振興の施策づくりは、大概次の三つの柱から成っている。

まず第一に県民の生活に「やすらぎ」と「うるおい」をもたらす生活文化の振興であり、第二には芸術文化の振興に資する県民自らが

創造する文化活動の場の拡充である。そして第三に土佐の文化財・伝統文化の保存と、これを現在に生かし個性ある「ふるさと文化」ともいべきものを創造するための施策を進めることである。実にこの上ない大事業といふべきか。

さて、芸術の秋たけなわである。去る十月一日、RKCホールに直木賞作家村松友規氏を迎えての文化講演会を皮切りに、高知市を始め県下各地で三十六回目を迎えた高知県芸術祭の各種イベントがくり広げられている。

日本における芸術文化活動は今ひとつの大きな曲り角に到っており、特にアマチュア芸術の振興は、特色ある地方芸術の育成とかかわって、一種の「生み出す悩み」をかかえているといわれている。

前文化庁長官三浦朱門氏の構想で今秋オーブニングする「国民文化祭」も、こうした課題に因應するために文化庁で企画され、すでに成果を上げていく「芸術祭」の地方開催（本年度は宮城県で開催）によって、地方のアマチュア芸術活動に活力を与えるところとなつていくと聞く。高知県が目指す個性ある地域文化活動の振興策も、こうした全国的な趨勢を十分踏まえながら、実効あるものにしていきたいものである。

土佐に腰をすえた私に一つの示唆を与えるものが二つあった。一つは灼熱の南国の陽射しの下、激しいロックバンドのビートの音と、個性を主張した衣装、独特の振り付けを伝統的な「よさこい節」のメロディーに調和させて踊りこなすエネルギーあふれる若者たち。いま一つは、九月に県立郷土文化会館で開催

されたオールドパワーズ展の静かなブームである。新たな芸術文化活動の創造と、これを中心となつて支える層として、今私は両極ともいえるこの二つの世代間的を絞ってみたいと考えている。

高知県の県民文化を更に個性豊かなものとし盛り上げていく上で、彼らに秘められた文化的エネルギーの吸収こそが大切だと思う。

加えて、かつてNHKが「日本最後の清流——四万十」を演出したように、土佐の生み出す「ふるさと文化」を全国的に巧みに売り出すだけの文化宣伝の力量を付けることも忘れてはならないと考えるが、これはまだ着任後日の浅い土佐知らずの一人よがりであろうか。

(高知県文化振興課長)

勉強

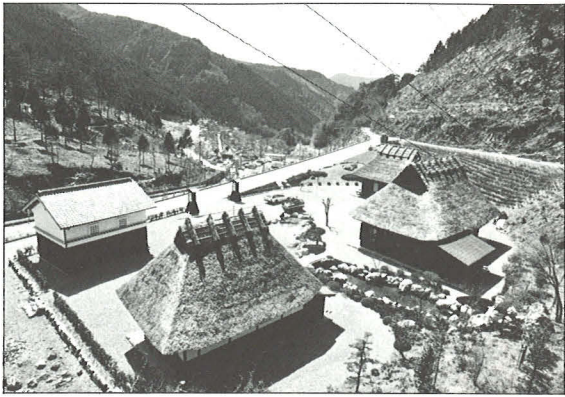
潮江東小四年 氏原正人

「ガラッ」
と姉が戸をあけた。
「まあ勉強しゅう
あしたは大雨で」
とわざとらしく大きい声でいった。
字が少しこゆくなつた。
指先に力がいはい。
勉強が先に進まない。
いつのまにか姉は出ていった。
「ふー」
思わずため息をついた。

『やまも』第10集募集作品より

森と水の文化の里づくり

中越 準一



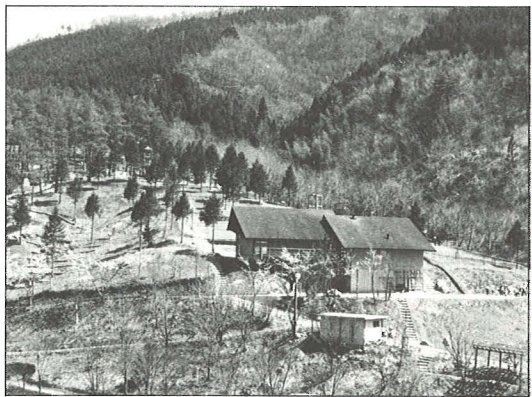
草ぶき民家(太郎川公園)

山あいにしがみつくように開田された棚田の稲も、黄金色にたわわに稔り、鎮守の森からは、津の山神楽の太鼓の音が、四囲の緑にこだまする。

これは、日本で最後の清流といわれる四万十川流域、津野山郷の秋の風物詩である。

かつて梶原町は「土佐のチベツト」とよくいわれたものであるが、龍河洞を発見された愛媛大学の山内浩教授は「四国カルストは、四国のスイスだ」と述べられた。海拔千メートルから千五百メートル、東西二十キロメートルに及ぶカルスト高原には、緑の中で草をはむ羊の群のように点在する石灰岩、その大自然の中に乳牛、土佐牛の群などが見られ、牧歌的でスイスの風景と変わらない。

日本の文化は、山村から生れたといわれる。戦前には、森に足を踏み入れると、苦むした一種独特の香りが漂い、ひんやりとした冷気を感じる山が多く見られたが、戦後の乱伐がたたり、森蔵な原生林が次第に姿を消したことは残念なことである。「荒廃した山に緑」を合言葉に、経済性の高い杉、桧を中心とした針葉樹の植林が進められ、高知県下で三十万ヘクタールを超える人工造林が行われたことは結構なことであるが、



きつつき学習館(太郎川公園)

外材の輸入増大と木造住宅建築の落ち込みなどによって、国産材の消費が減少し、山に対する考え方も大きな変化を見せはじめた。

森は空気を浄化し、水をつくり、山の崩壊を防止して動植物の息をたすけるが、若年林の場合、ひとたび大雨が降れば、雨水は地下へ浸透するよりも地表を洗い、濁流となつて下流に土砂を流出する。

昔は、大雨が降っても川の水の濁りはおそく、流量も徐々に増水し、減水の速度もおそかったと古者は語る。米づくりが森をつくったとも云われるが、米作転換は水田を放棄し、人と山とのつながりを断とうとして

いる。

科学技術の進歩は、人類の生活様式を変え、生活水準を高める一方、自然の破壊を助長した。こうした状態では調和のとれた文化の向上は望むべくもないことである。

昔のような清流を取り戻すには如何にすれば良いか。過度に密植された人工造林の間伐を促進し、下草が繁茂し広葉樹も混在した「照る山紅葉」といわれるような、四季折々の変化を見せる森をより多くつくること、水源涵養機能を高め、野鳥、昆虫、動物の生息出来る環境をつくり出すことになる。

このような考えのもとに、梶原町では二十一世紀を展望して「森と水の文化構想」を策定した。これは都市と農村との交流を深め、いたわりとやすらぎのある調和のとれた自然環境の中で、健康でリフレッシュした里づくりを目標としたものである。

ノーベルを生んだスウェーデンが「森と湖の国」といわれるように、清流のあるところに文化が生まれた。森は水をつくり、水は森羅万象の生命の根源である。国の重要文化財である津の山神楽も、森と水の中で育ちました。いたわりの文化、茶堂の心もしかり。老子の云う「上善は水のごとし」という言葉を味わいつつ。

(梶原町長)

みつまた周辺

猪野 睦

和紙のことを知る人も少なくなつた。ほくもあまり知っていないわけではない。ただ職場の仕事で、みつまた調査をいくどかしたことがあつた。仁淀川をさかのぼり吾北村へぬけ、そこから本川へむかう道ぞいから山ひだをぬう支流の支流を登つていつた集落(松ノ木)だつた。その急傾斜の山ひだには、農家が点在していたが、その集落がいくどかでかけたところだつた。春にゆくとみつまたは黄色い素朴な花を咲かせていた。

盛んだつたミツマタ栽培

いつとき紙王国といわれ、大蔵省の紙幣原料に使われたみつまたは、高知の特産物だつた。とくに加工の水のかかりで仁淀川筋はみつまた栽培が盛んだつた。そのみつまたを正月すぎると伐り、蒸し、皮をはぎ、さらに皮の黒い表皮をへラではぎとっていく。それを冬の川につけさらした。それを白皮といつた。川でさらした白皮は貫いくらで、一月、二月に売られていった。昔から苛酷な念のいる労働の割には賃にならない仕事だつた。ほくがなんとか調査にでかけたときも、この近世から引き継がれてきた原始労働といつていい手労働は続いていた。いま、春さきの山の斜面に点在するきいろい花は、かつては県境の集落一帯をいろどつてきていた。仁淀川をさかのぼつた支流をわけ入つた奥地の集落一帯では、みつまたのことをリンチョウとも言っていた。冬に行つたとき釣鐘状のオケを吊るして、そのなかに伐りとつたみつまたを束ね、つまりコシキをかぶせてみつ

またを蒸していたが、その初老の人が、みつまたをリンチョウとよつていたのが印象に残つた。その後、あるとき、年輩の人が小学校時代に習字をよく習つたが、リンチョウ紙に書いたと言つていのを聞いた。なるほどリンチョウ紙か。昔は習字にみつまたで書いた上質紙を使つていたのかと思つたことがある。おそらくいま、リンチョウ紙といつても解る人が少なくなつてきているのではあるまいか。

ほくが調査したのは、みつまたの生産から出荷まで、つまり苗を植え、育て、伐り、蒸し、皮をはぎ、水にさらし白皮にしてゆくまでの原料生産過程だつた。年々栽培の減つていくのはあたり前といえる割の合わない作物だつた。

いまではこのみつまたも、新聞やテレビの季節のそえものとして結構、絵になる。咲きそろふみつまたの花や、コシキをかぶせて冬の日射しのなかで蒸している風景など、絵として写真として人をなごませる。そしてそれを使って漉く和紙も貴重品になつてきた。

カミソのキズを切る

戦前の高知のプロレタリア詩人に広海大治がいた。この人は佐川で『田園の花』というガリ刷り機関誌に詩をかいていたが、戦後になつて『日本プロレタリア文学大

系』に代表作が収録された人だつた。

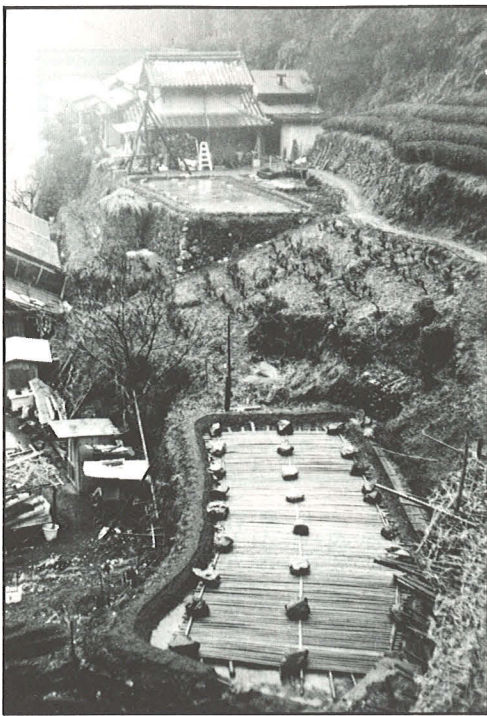
その広海大治がペンネーム室戸鳴海で『暁の製糸工場』という詩を昭和七年にかいてるが、そのなかに

夜も寝ずにカミソのキズを切つてゐるであらう
お母さん

というのがでてくる。この「カミソのキズ」がなんのことかよく解らなかつた。なん人かきいたが納得のいく解説をしてくれる人はいなかつた。当時の人たちにとつては、ごくあたり前の日常語であり、生産にかかわる重要な言葉であつたはずである。

カミソとはカジ、ミツマタの紙麻のことであり、いわゆる白皮といわれる蒸してさらした白い皮のことだつた。そしてキズとは、その白皮のなかにのこる黒いほぎ残しの部分であり、それを取り去つていく原料精製過程を「カミソのキズを切る」と言っているのだつた。薄暗い土間にムシロなど敷いて、冬の寒さのなかで手をかじかませながら、あかぎれなどにも泣くつらい労働ではなかつたか。上質の紙を漉くためには、こうした手労働が必要だつた。もういまでは「カミソのキズ」の解る人は

現在も和紙生産を行っている吾川村・寺村の風景



ほとんどいないのではあるまいか。

土地台帳に残る筆文字

リンチョウ紙という言葉も珍らしかつたが、これもこういう原始労働の上につくられてきたものだつた。習字も、筆を手にする人もへり、筆字のうまい人もへつた。字のうまさとは少年時代にみっちり墨をすつて字を書きこんできた人たちが手にしてきたものではなかつた。字のうまさには驚いたのは、役場に残っている土地台帳を見たときだつた。一筆一筆の土地の履歴書ともいふべきものである。明治初期の地租改正時から、そのときの所有者を起点にしているが、その明治期の台帳の字は、じつに見事というほかはない。腰のきまつた筆字で文字がかきつけてある。明治初期の役場書記はなんととうまい字の書き手であろう。むろんこの役場にもいた書記であらうが、その字は抜群としかいいようがない。

この土地台帳の字も、明治初期のうまい筆字から大正をへ、昭和期のみまあとといえる字の時代をへて、戦後は水晶ペンと墨汁で書いたのだったか。それが近年はボールペン字になり、さいきんでは活字に変わつてきた。字書きの変遷、筆記用具の変遷ということもあらう。だが明治初期の土地台帳の字のうまさ、見事さは、丹念な文化を考えさせてくる。

それに土地台帳の紙の質も変わつてきた。おそらく明治期以降、昭和戦前まで大量に使われた台帳用紙は、みつまたのリンチョウ紙といわれたものではなかつたか。およそ明治期に書かれてから一〇〇年以上上つた。紙は傷みも古びもしていない。それに筆字が、その字の書き手がそこいでもするように、まったく当時のままで残つている。うなる文字といつてよかつた。忘れられた和紙の歴史をのぞいた気がした。

（詩人）
高知ペンクラブ事務局長

高知市近代年表 (二)

(注) △は月日が不詳

1月	明治十年(一八七七)	西弘小路警察出張所を警察所と改称
1・30	西南戦争始まる	
2・22	第七国立銀行設立(種崎町百八十四番、資本金十五万円)	
6・9	西郷、熊本城包圍し谷千城籠城す	
8・8	片岡健吉、国会開設建白書を京都市行在所に提出	
8・25	立志社の獄(逮捕者四十数人)	
12月	立志社、『海南新誌』『土陽雑誌』を創刊(吉田正春主宰)	
12月	発揚社、修立社、南獄社、共行社、南洋社、有信社が土佐聯合社を組織	
1・10	明治十一年(一八七八)	
3月	『海南新誌』『土陽雑誌』を合併して『土陽新聞』創刊	
3月	高知県女子師範学校開設(全国第六番目)	
3月	立志社、愛国社(自由民権運動の指導機関)再興を決定	
4月	高知一松山間に電信線架設	
5・14	大久保利通暗殺される	
6月	魚市場の慶長社設立	
7月	土佐国州会開かれる	
8・20	立志社の獄決す(林有造、大江卓らに禁固十年以下の判決)	
8・25	本町の高知郵便役所内に電信分局設置	
9・11	大阪で愛国社再興大会開催	
9・16	楠瀬喜多、県庁に婦人参政権を要求	
12月	大小区制を廢し郡区町村編成法施行	

12月	明治十二年(一八七九)	県下に郡制施行
10・29	1・1	梟首刑廢止
10・12	1・4	大阪で朝日新聞創刊
9・27	2・14	町村会規則制定
8・28	4月	植木枝盛『民権自由論』著す
7月	7月	帯屋町に神宮教本部設置
5月	8・1	高知公園懷徳館に書籍館設置
5月	10・30	第一回県会が開かれ、片岡健吉を議長に選出
5月	3・2	明治十三年(一八八〇)
5月	3・13	高知県管下の阿波国、分離して徳島県となる
5月	3・17	大阪で『愛国志林』創刊(のち『愛国新誌』)
5月	4・5	国会期成同盟結成(愛国社第四次大会)
5月	4・17	集會条例制定
5月	4・22	片岡健吉等、国会開設請願書を太政官に提出
5月	7・5	県庁内に警察本部を、要地に警察署と分署を設置
5月	9・20	第二次『高知新聞』創刊
5月	11・10	県令北垣国道、上街町会規則に婦人参政権条項を認む
5月	12・10	物産蒐集所を高知公園に移転
5月	△	黒住教中教会所を細工町に開設
5月	△	この年徒刑所を監獄と改む
5月	△	明治十四年(一八八一)
5月	△	立志社が憲法調査局設置
5月	△	斬首刑廢止
5月	△	植木枝盛、憲法草案起草始む
5月	△	県立医学学校付属病院新築落成
5月	△	国会開設(明治二十三年)の詔勅発せられる(明治十四年の政変)
5月	△	板垣退助、東京で自由党を組織し総理となる
5月	△	本町に掘詰座開設

小津高校家庭科クラブ

井上 澄子



子どものおもちゃの世界も、最近はややコンピュータゲームをはじめ、数多くのメカニク的なものが氾濫しています。そんな状況の中で愛情をこめて創った心温かいおもちゃの良さを直せたらと取り組んだのが「創作おもちゃの研究」です。単に「面白い」というだけでなく、おもちゃで遊ぶうちに物を創る力や考える力、大切に作る心が自然に育っていきうなおもちゃを創るよう心掛けています。

たとえば布を素材にある場面を構成し、そこにスナップやボタンなどを付けて、主人公の人物を自由に移動させられる布製の「絵本」があります。自分でさまざまな物語を作ることができ、基本的な生活習慣や生活技術を楽しく遊びながら自然に身につけられるよう工夫されています。このほかトウモロコシの皮と包装紙を使った人形なども創ってみました。

今年も「遊具展」を九月中旬にNHK高知放送局ロビーで開催しました。わずか一週間でしたが、幼児教育関係者や小児科の病院関係、看護学校の先生など数

日本野鳥の会高知支部

中西 和夫

日本野鳥の会高知支部は、それまでに約十五年間活動してきた「高知県野鳥保護の会」が、発展的に解消して今年四月に発足しました。

現在会員はおよそ八十人で、会員外にも呼びかけて毎月一回探鳥会を開き、高知市を中心に身近な野鳥の姿や声を楽しんでいます。支部報(季刊)は、地域性をなんとか出したいとの思いを込めて、県鳥であるヤイロチョウの鳴き声から『しろべん』と名づけ、探鳥記、野鳥情報、観察ノートのつけ方など、野鳥に関することから会員の話題まで掲載しています。最近では、自然のなかで野鳥に接し親しむことが、かなり市民権を持つようになってきました。高知県は森林も多く野鳥たちにとっては住みよい環境のように思われがちですが、実は山は植林ばかりでエサや巣を作る場所に乏しいのです。



さらに高知県は全国的にも、メジロをはじめ野鳥の飼育がとくに盛んなために密猟が多く、また焼き鳥のための密猟も行われるなど

高知県合唱連盟

向原 寛



昭和三十五年春、アマチュア合唱団の全国組織である、全日本合唱連盟傘下の第七番目の地区連として、全日本合唱連盟四国支部が設立されました。その時、県単位の連盟組織として、高知県合唱連盟が同時に誕生、発足しました。現在は県下広く、高校、大学、一般、お母さんコーラスの四部門からなる、計二十四団体のアマチュア合唱団の加盟によって組織されています。県内では、昭和四十七年の歌劇「沖繩」、四十九年と五十二年の「第九」などのゴールドブレンド・コンサート、五十三年の歌劇「蝶々夫人」、六十年の高知交響楽団との「第九」など、高知県合唱連盟はその全てに参加、協力し、各演奏会を成功させる大きな原動力となりました。

連盟独自の活動は、毎年六月の高知県合唱祭、七月の全日本お母さんコーラス高知県大会、九月の地区合唱コンクール、三月と八月の合唱講習会を行っています。本年八月に横濱市で開催された「第九回全日本お母さんコーラス全国大会」で、県代表「コーラス大籐」が優秀賞の「ひ

学校通信紹介(二)

凡例: ①誌名(九月現在の号数) ②発行部数(発行間隔) ③内容・特色

大津中学校

- ①大津(本年度五五号)
- ②保護者数(週三回くらい)
- ③一カ月の予定や連絡事項 三里中学校

①みさと(二九四号)

②八二〇部(月二回程度)

③学級通信の発行も多いので、記事が重ならない工夫をしており、社会問題、教育の課題等に四分の一ページをさいている。

南海中学校

①南風(八四二号)

②一四五〇部(週刊)

③学校の実情を知らせ、父兄、地域の人々とともに教育を考えてゆくためのパイプ役を果たす。

朝倉中学校

①学校便り(本年度二二号)

②九二〇部(不定期、月一回以上)

③学校生活の情報提供と、教育問題等について保護者と学校の意見交換を行ない、共に考える場とする。

初月小学校

①くまがわ(一一三三号)

②八〇〇部(週刊)

③学校のいろいろな様子を知らせ、保護者と学校の信頼関係をつくる。

浦戸小学校

①うらら(一一四号)

②二五〇部(月一―二回)

③学校教育をより深く理解していた

布師田小学校

①布師田小学校だより(本年度一〇

号)

②一六〇部(月一回)

③学校行事などの紹介や生活指導面の記事を掲載しています。

一宮東小学校

①一宮東小だより(五二二号)

②四七〇部(月二回)

③学校行事を中心に掲載しています。

神田小学校

①えぼし(四五〇号)

②九〇〇部(月一回)

③学校、PTA、地域とを結び認識と理解を求める場とする。

効率化の陰

本は定価販売だから、どこで買ってもよいようなものだが、それぞれに好みの書店があるように思う。本がよくそろっているとか、お目当ての本がすぐさがし出せるとか、注文した本を早くとり寄せてくれるとか、理由はさまざまあるが、店員の接客態度いかんも大きな条件になる。好感のもてる書店かそうでない書店かは、ほとんどこれ

たえばほしい本の広告を見て書店に行く。「〇〇書店の△△本を買いたいが……」と言う。書棚をちらっとさがして「そんな本はありません」と店員がいう。これでは話にならない。親切な店員は出版目録などを調べて「どうも絶版ですね」という。親切はあり

風伯

出向いたのだから、店員教育をもっと徹底してやってもらいたいと思う。出版情報を読者より遅いようではがっかりする。

こんな苦情をその場で言っても、お互いに気分をわるくするだけなので、黙って帰ってしまおう。こうしてついつい読みたい本を買いたくがしてしまおうこともある。

店員ばかりを責めてもいけない。版元の方も出版情報や再版情報を末端にまで周知させる努力をもっとしてもらわなくてはならない。このころは効率化ばかりで、売れる本は大部分が大都市の書店かぎりになって、地方の書店には以前のようにすべての本がまわって来なくなっている。こういうことも地方文化にとって重要な問題のひとつである。

(亜)

エイリアン10

映画「エイリアンII」が若い層、殊に女性の間で評判である。そこで旧人も一見に及んだ。筋は至極単純である。宇宙惑星の基地の一つ地球人村が、蜘蛛にまがう巨大動物に襲われる。アメリカ海兵隊の荒くれ男達に交じって一人のインテリ女性怪物と戦い、遂に勝利を治める話である。ここでは宇宙船と基地もまだ幼稚で、人間の冷凍装置と空気調整くらいである。進歩といえばロボット人間で、これは確実な理性と判断を所有している。身体が二つに切れても頭で生きていられる。

さて、現代の若い女性たちを興奮させたものは何か、宇宙的発想をもつものはこれといって無い。どうやら彼女らを魅了しているものはこの地球上の駄目男を睥睨する同性の優秀さに

あるらしい。なんのことはないすこぶる地球的発想である。アメリカ的マナーと榮譽に憧れる男性が西洋の基本的人間尊重、つまり愛II女性によって批判される。これもウーマン・リヴの論理のひとつか。

ところでこの映画、男性にとって見落せない個処がある。それは蜘蛛怪物が人間の女性の内へ卵を生みつけることである。時が満つると怪物が腹を割って出てくる。女性の内部にはそんな怪物がいたのかとつい恐ろしくなる。知人のひとりにエイリアンと仇名された若い女性がいる。彼女は太陽の回転・遠近による宇宙の温度差に素早く感能する。一例をあげれば、雪の降る前日や雨の前は直ぐ頭痛がしてくる。これを称して日和病みという。これこそエイリアン10に住いする女性だと私は思っている。

(旧人)

〈11月15日発売〉

土佐の芸能

高木啓夫著

定価四八〇〇円
B5判変形
本文三二〇ページ
口絵一六ページ
（カラー八ページ）
（モノクロ八ページ）
箱入り



名野川神楽・吾川村下北川

四国山脈に隔てられた高知県は、その地理的要因からも中世期の芸能の形態をいまに伝えるものも数多く、芸能の宝庫ともいわれています。代々受け継がれてきた民俗芸能は、いまなおそれぞれの地域で人々の暮らしと密接に結びつき、心の依りどころとなっています。

本書は高知県における民俗芸能研究の第一人者、高木啓夫氏の長年にわたる研究成果をまとめたもので、県内各地区に伝わるさまざまな芸能を神楽、棒踊り、獅子舞、門付芸など十三項目に分類し、それぞれについて詳細な解説を加えたものです。またその考察は民俗芸能をはぐくんできた祭りの状況にもおよび、民俗文化を考えるうえで貴重な一書といえます。

刊行は十一月中旬を予定し、市内主要書店ほか当事業団でも販売いたします。

郷土芸能鑑賞会

〈特別企画〉

土佐の芸能

今回『土佐の芸能』の刊行を記念して、郷土芸能の鑑賞会を開催いたします。

毎年十一月七日に安田町小川・川上神社に奉納される「小川獅子舞」や物部村の木挽き歌、祭文語りなど、日ごろ地域外では見る機会のない獅子舞、神楽、棒踊りなどを特に選び、著者高木啓夫氏の監修により特別に上演いたします。

日時 十一月十八日（火）
開演午後六時三十分
（開場六時、終演九時）

会場 RKCホール

入場料 当日券六百元・前売券五百円

（前売券は市内各ブレイガイ
ドで発売します）



演目

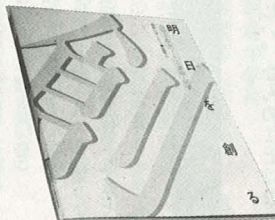
- 練三番双（梶原町）
 - 施餓鬼念物（西土佐村）
 - 碁盤振り、棒打ち（香北町）
 - 小川獅子舞（安田町）
 - 土佐早明浦ちよんがり（土佐町）
 - 木挽き歌、祭物語り他（物部村）
 - 八社神楽（十和村）
- 秋の宵、郷土芸能のひとつときをお楽しみ下さい。

高知レポート 1

1986・7

高知市・都市づくりへの課題と展望

明日を創る



A5判 本文124ページ
編集 若竹まちづくり研究所

高知のまちづくりに関する11分野の代表的な17の計画、提言等を取り上げて紹介、解説。各々の計画、提言のテーマ、課題、考え方、方策等をダイジェストにして総覧。巻末には全国的な視野から高知の計画、提言を対照する資料編を添付。必携のまちづくり手引き書！

定価 1,000円 お求めは市内書店もしくは財団まで

財団法人 高知市文化振興事業団
〒780 高知市本町五丁目二番三号
TEL (〇八八八) ③四三六五
郵便振替 徳島8、14869